第3種郵便物認可

障がいのある人も互いに認めて支え合う社会を目指して、就労をテーマに考えたみなさん＝2024年11月30日、八重山毎日新聞社

和泉　職員のみなさんが全員のことを分かってくれているので、悩んだりすることもあるけれど、何とか続けられている。今のチームは支援スタッフを含めて6人。ものすごく頑張ることができている。仕事に対するこだわりは、お菓子は口にされるものだから、きれいにしっかり作ること。最重要です。

津嘉山　和泉さんは、彼が小学生のころから療育相談で知っている。彼は学校の卒業後、2年間、就労支援施設にいた。そこに閉じちゃうタイミングで声を掛けてきた。うちのスタート当初からのメンバーらっている。切磋琢さんが、ゆくゆくは彼らの利用者に「一日一つ高い給料を出せるよう頑張ろう」と言い続けてくれている。今のチームは支援スタッフ含めて6人。ものすごく頑張ることができている。仕事に対するこだわりは、お菓子は口にされるものだから、きれいにしっかり作ること。最重要です。

津嘉山　和泉さんは、彼が小学生のころから療育相談で知っている。彼は学校の卒業後、2年間、就労支援施設にいた。そこに閉じちゃうタイミングで声を掛けてきた。うちのスタート当初からのメンバーです。仕事もしっかり取り組んでいて、すごく熱心にやってくれる。

黒島　はちゃくみのグループ教室から初めてエージングする菓子は、一般の方でも親しみ、それをやっているのはすごい。

津嘉山　エージング食堂さんにかかる根気強さ。毎週ついていた時間があったと思う。ゆくはの食品製造部のちっちゃな作業とかでも、空港まで取りに行くこともある。仕分け作業やイベントの配達をしていて、美崎緑は50数戸配っている。

黒島　うちの隣が新報・朝日販売店で、スポーツ新聞、農業新聞、日本経済新聞も配達している。配達先は、どの方がどの新聞を読んでいるか把握して配らないといけないので、効率とテクニックが必要。新里さんはそれを全て覚えている。

新里　ゆくはの前は、八重山毎日新聞の販売店にお世話になっていた。配達場所を全く知らない状態で、配達場所を覚えてこい、マスク、キャップもしっかり着けてこいと言われて驚いた。何がすごいかと言うと、ここの仕事は自分ができると思っていたが、ここに来て、八重山毎日新聞の販売店に「配達させてください」と売り込み仕事を受けたこと。支援員なども加わっていなくて、全部自分で決めて仕事にしている。自信がないとチャレンジできない。すごい人だなと思った。

仲宗根　新聞配達部の新部長、役職をつけた方がいいのでは？

金貴　（笑）。

―障がいのある方と健常者で異なる職場・職種の境界を取り払うには。

黒島　就労支援事業所から利用者さんを紹介する際に、性別・年齢・過去の業務歴などをひとつある。支援学校などの段階から、マッチングさせることもできる。人材不足はどこの企業の悩みでもあるが、A型・B型事業所の方に人材を育てる場を企業の方に提供することで、企業側の人材不足も解消できるのではないか。

津嘉山　私たちのような障がい者支援事業所が実践してきたことの中に、利用者さんの発掘していくには、利用者さんの中にリーダーになり、次は支援者の一人になるケースがある。当社では意図的にそれをやっていくようにしている。

―障がいのある方と健常者が一緒に活躍するためには。

新垣　ここには「心の境界」があるか。まず基本的な価値観の中で相手にある程度の健康を求める必要がある。支援学校などの段階から、マッチングさせることもできる。人材不足はどこの企業の悩みでもあるが、A型・B型事業所の方に人材を育てる場を企業の方に提供することで、企業側の人材不足も解消できるのではないか。

津嘉山　私たちのような障がい者支援事業所が実践してきたことの中に、利用者さんの発掘していくには、利用者さんの中にリーダーになり、次は支援者の一人になるケースがある。当社では意図的にそれをやっていくようにしている。

―将来チャレンジしたい職種はあるか。

仲宗根　看護師。高齢の方々や事業所に対して、清掃、印刷、製菓、弁当販売、データ入力等の役務、商品の販売、作った商品を直接届けるなどの仕事を通じて、障がいのある方々と一緒に働ける職場作りに発注するよう努めるため、障がい者就労施設等の事業者を紹介する第3回目に市役所内で説明会を開催するように努めるとともに、障がいのある方が働きやすい環境を官公庁が率先して整備するよう働きかけていきたい。

新垣　将来の夢はパイロット。今は、アンガマ踊って芸術的活動に挑戦したい。

津嘉山　平成13（2001）年に「ワークシェア、障がいのある方々の療育相談を担当するコーディネーターがスタートとなった。当時、開わっていた子どもたちが大人になった時に働く場所がない、障がいのある児童たちが入所施設を出ざるを得ない現状でした。そこで立ち上げたのが「ゆくはの森」という会社。障がい者支援のA型や、生活する場のグループホームと相談支援事業所をつくってもお手伝いしている。

稲田　2023年、八重山特別支援学校に赴任。出身は竜美大島で、実は県の教育委員会の仕事をしていた時、八重山地域の特別支援教育をもっと強化して充実させていこうという取り組みがある。販売店として「この方にはちょっと厳しいかな」と思うこれしいな」と感じる部分がある。黒島さんや新垣さんも触れていた「多分こうだろう」という決めつけをしてくる、またそれを合理的配慮の提供は優先していない。（障がいのある方にも）もしかしたら得意なことはいっぱいあるはずなのに、そこに仕事をマッチングさせるには、少し工夫すれば、合理的配慮の提供は優先していない。

―企業側がA型事業所に相談したり、人材を紹介してもらえるのはないか。

津嘉山　利用者さんによっては得意・不得意や能力の差があったりする。私たちから見ると、企業さんが事業所の紹介をしてくれるとありがたい。いろんな事業所があって、自分たちだけで問題を抱えずに、いろんな事業所がこれだけあるんだよ、ということを知ってもらうことはいいことだと思う。

―障がいのある人が仕事の現場で困りごとが発生した場合、どう対応しているか。

黒島　基本的には本人の特性を理解した上で、職場の方に「こういう特性があるから、こういう風に接してください」と伝えている。

新垣　次のステップを考えて、能率作業の補助や車の洗車の取り組みをしている。他の業務が何度もあるので、業務が細分化されるとできることが多くなるのではないか。

津嘉山　就労継続支援事業所B型は、最低賃金を保障しない共同作業所と位置付けている。それが18歳から始まった。それが18歳から65歳まで同じ場所にいるという現状。中には5年間やっても意欲を持てない方や、「私はこれだけの仕事ができる」という方々へサービスの提供、ステップアップの支援が「できない」ということは、ゆくはぶしの事業所を開設した2010年4月、A型を開設した。その後、一気に増えた。遅ればせながら2018年10月、B型を開設した。

仲宗根　ゆくはぶしの開設は、コンビニ、JA、官民関係、商社関係の方々にお世話になった。

今の新聞配達は、コンビニ、ポスティングが主になっている。やりがいという点では絶対に全盲の方に「配達の仕事をしてください」と言えない。

―働いてみての感想。仕事への取り組み方は。

仲宗根　ゆくはぶしの開設は、障がいのある方と一般の方が共に働く社会の実現に向けて、私たち積極的に貢献していきたいと考えている。

黒島　津嘉山社長と出会ったきっかけは、野球塾クラブの立ち上げ時、子どもたちの国際交流の時だった。その頃から相談があった。私たち新聞配達員の確保に苦労していたので、まずはチャレンジスペースでゆくはぶしの利用者さんにお願いした。現在、配達員の半数はゆくはぶしが担っていて、とても助かっている。

新垣　弊社は前から、就労継続支援事業所さんに社内の草刈りや作業などをスポットでお願いしていた。現在は継続的な取り組みとして、障がいのある方にお願いしている。

津嘉山　人材バンクのネットワークが整えばこういう仕事があるんだけどやってもらえないかな」という相談をしてこのチームにやってもらうようにと一緒に活躍するためには、企業側の業務改善につながると考えている。

黒島　新聞配達業務は一例ですが、時から日中までの間などで、業務のメインは午前中。これまで高齢者の方を中心に配達業務を保が難しくて運営していた。そこで、ゆくはぶしと連携して、チームをつくり、まずは「区画やってみよう」となった。

津嘉山　午前中に時間帯で区画を決めて、同じ業務を納める。ほとんどが朝の作業の投入投入。午後からは、ゆくはぶしにお願いできないか」と考えるようになった